

委員会視察報告書

委員会名	産業建設常任委員会
視察地	埼玉県熊谷市
調査項目	中心市街地活性化
調査目的	熊谷市における多様な主体が関わる中心市街地活性化のための取組を調査することで、柏崎市の中心市街地活性化に対し、より有効な手法を探ることを目的とする。
日時	令和8（2026）7月15日（水）10時～11時45分
場所	熊谷市役所
調査概要	□熊谷市の歴史、概要について ・熊谷市は人口約19万人、旧中山道の宿場町として栄えた歴史を持つ。新幹線や各種鉄道の乗り入れ、幹線道路が整備化され、埼玉県北部における交通の結節点の役割を担っている。 ・熊谷市の中心市街地は、戦災復興土地区画整理事業により、現在の町並みの骨格が形成され、その後、駅前再開発、星川シンボルロード整備事業などにより、都市基盤が整えられた。 □中心市街地における計画について ・過去、中心市街地活性化基本計画を定めていたが、国の認定には至っておらず、現在は、令和6年度から令和10年度までが計画期間である都市再生整備計画が進行中であり「まちなかウォーカブル推進事業」により交流人口の増加、歩きたくなる歩行者空間創出を目指している。 □中心市街地活性化推進のための体制について ・市内まちづくり各団体定例会議と市役所内のまちなか・まちづくりプロジェクトチームが集まり、「星川まちなかアセット活用公民連携会議」を組織して月に一度、公民が集う場を設けている。 ・熊谷市には2つのビジョンに基づきまちづくりを行っている。 1 「熊谷まちなか再生未来ビジョン」（令和4年度作成） 発行元 （一社）熊谷まちなか再生エリアプラットフォーム 熊谷市・地元企業・団体・大学の連携により作成 2 「星川将来ビジョン」（令和5年度作成）

	発行元 星川将来ビジョン編集委員会 市と地元プレーヤーを中心に28団体750人にヒアリングを行い作成 □主な取組 ・上記計画やビジョンを基に 中心市街地の水辺空間を活用した星川夜市や星川広場の整備 市民から遺贈を受けた未活用物件の活用 民間ビル内の公衆トイレの整備 星川通線グリーンスローモビリティ走行社会実験 市営本町駐車場の値下げ 空き店舗を活用したまちなか交流広場の整備 熊谷市タウンマネジメント活動証明書の交付 市民参加型プラットフォーム「ツノルバ」の整備 などが行われた。 また、中心市街地の回遊性促進事業として、都市ポータルアプリ「クマぶら」を活用した「熊谷謎解きまちめぐり」や大型商業施設と市内専門店が連携したデジタルスタンプラリー企画などを行っている。 □以前から策定していた中心市街地活性化基本計画から、実際に推進する交付対象事業に合わせて都市再生整備計画を策定し、計画エリアに多少の差はあるものの様々な事業を基幹事業に据えて中心市街地活性化を推進している現状を知ることができた。 庁内横断のまちなか・まちづくりプロジェクトチームとして事務局である商業観光課と政策調査課、都市計画課が一体となって民間のまちづくり団体と協働する形で「星川まちなかアセット活用公民連携会議」が開催されている状況を知ることができた。 この会議が「官民」でなく「公民」という呼称を使っている意味として、「官民」では官主導の印象を受けるが「公民」とすることでまちづくりのプレーヤーである市民との協働を進めていきたい旨の説明があり、行政側のまちづくりに対するスタンスを知ることができた。 また、質疑中に、市営駐車場の料金改定について、以前は大型商業施設の駐車場が車で中心市街地に来る市民の受け皿となっていたが、より中心に近い市営駐車場をハブとして中心市街地に足を向けて欲しい目的から改定に至った経緯とその成果の説明を受け、市営駐車場単体での収益性と市民の利便性のバランスについて知る機会となった。
--	--

	また、バルセロナ市で開発された市民参加型プラットフォーム「Decidim」の熊谷市版「ツノルバ」を開発した経緯の説明から、「Decidim」で行うことのできる市民の意見収集、討論、投票、政策提案の機能から熊谷市では意見収集の機能を採用し、オンラインによる活動・プロジェクトへの市民参加を促す工夫について知る機会となった。 熊谷市はスマートシティ宣言を行い、前述した「ツノルバ」や都市ポータルアプリ「クマぶら」の採用などの先進的な取組を行っている市であり、その実情を聞くことができる機会となった。
視 察 の 様 子	  熊谷市役所での説明 熊谷市議場にて
質 疑 応 答	質問1 庁内横断的な推進体制と、商店街・住民との連携の工夫について 回答1 「星川まちなかアセット活用公民連携会議」が月に一度開催され、庁内横断のプロジェクトチームとまちづくりに関わる各団体の情報共有の場となっている。 質問2 中心市街地活性化の気運醸成に効果のあった取組について 回答2 令和4年度と令和5年度に発行されたビジョン作成に際し、官民学の連携や市と地元プレーヤーによって28団体750名にヒアリングを実施するなどの作成過程により気運が醸成されたものと考ええる。 質問3 「熊谷謎解きまちめぐり」をはじめとした回遊性促進事業の実施経緯と効果について 回答3 「熊谷謎解きまちめぐり」は都市ポータルアプリ「クマぶら」

	の利用促進を目的としたものである。また、アプリによるポイント制やランキングなどのゲーム性をまちなか回遊の動機づけとしたゲーミフィケーションの観点から実施した。 質問4 空き店舗対策や商業機能強化に有効だった施策について 回答4 若手の商業者への支援が重要と認識している。熊谷市では大型商業施設と小規模専門店が連携したデジタルスタンプラリーなどの事業を通じて中心市街地の魅力アップを図っている。 質問5 回遊性向上や商店街利用促進の成果をどのように評価しているか 回答5 回遊性の評価は難しく、定点での交通量調査にとどまっている。デジタルスタンプラリーなどで各店舗へのアクセス数やスタンプ獲得人数がデータとして示せる数字となる。 質問6 データ活用の状況と今後の課題、展望について 回答6 市営駐車場の料金改定において、改定前の人流データから大型商業施設駐車場の利用形態の実態が分かり、そのことからより中心市街地寄りの市営駐車場の料金改定などを行い、人の流れに変化が生まれた。
委員会所感	【三宮直人】 今回の熊谷市の行政視察では、人口減少や郊外型商業施設の進出など地方都市共通の課題を抱える中、駅を中心とした都市機能の集約と官民連携による中心市街地活性化に取り組んでいる状況について学ぶことができた。熊谷市でも、単に商店街の活性化を図るのではなく、日常的な人の流れを生み出すまちづくりを進めており、その考え方は非常に参考となった。 特に印象的だったのは、熊谷駅を都市活動の拠点として位置付け、公共施設や商業施設、居住機能を計画的に配置し、駅周辺全体の価値向上を図っている点である。また、行政だけでなく、民間事業者や商工団体、地域住民がそれぞれの役割を担いながら事業を推進しており、持続可能なまちづくりには多様な主体による連携が不可欠であることを改めて認

識した。また、「熊谷謎解きまちめぐり」については、イベント時だけでなく日常のにぎわいを増やし魅力を発見してもらうための取組と理解した。

今回、3市を視察したが、共通しているのは、「イベント依存からの脱却（日常のまちなか活性化）」「歩行者中心の空間整備（車歩分離など）」である。さらに、「官民連携ではなく公民連携（市民やNPOも含めた幅広い協働）」である。「柏崎刈羽地域共創イニシアティブ」が公の核になってほしいと考える。

【西川弘美】

熊谷市では、公民連携によるまちづくりを推進するため、庁内の「まちなか・まちづくりプロジェクトチーム」を中心に、部署横断で情報共有を行うとともに、市内まちづくり団体や民間事業者が参加する定例会議、公民連携会議を毎月開催するなど、官民が継続的に連携できる体制を構築している点が印象的であった。また、「熊谷まちなか再生未来ビジョン」や「星川将来ビジョン」は、目指す将来像やテーマが分かりやすく整理され、市民と方向性を共有しやすい内容となっており、まちづくりへの理解や参加を促す工夫として参考になった。さらに、市有財産の有効活用、公衆トイレや市営駐車場、交流広場の活用などは、柏崎市でも導入を検討できる取組であると感じた。加えて、市民参加型プラットフォーム「ツノルバ」は、幅広い世代から意見を集める新たな手法として参考となった。

【山崎智仁】

熊谷市は人口規模、人口構成、経済規模ともに柏崎とは状況が異なる市であるが、その分様々な試行が行われていることから、様々な学びがあった。まちづくりにおけるデジタル活用の分野においてはポイントを活用している点など柏崎と近い取組もあったが、そこから得られるデータについては回遊性の評価方法など更なる技術革新が必要な分野であることを知る機会となった。また、市民が対象事業に対してオンラインで発言できるプラットフォームに関してはその運用方法に難しい点があるものと感じた。

また、「星川まちなか活用公民連携会議」は開催され始めて半年であるとのことだったが、月に一度まちづくりのプレーヤーと市が認識を共有できる場があることは非常に重要で、まちの抱える実情に対し、より効果的な対策が打てる場になると感じた。

【佐藤正典】

熊谷市は言わずと知れた、全国でも最も暑い都市の一つである。今回の視察が夏季であったことから、訪れた中心市街地のいたるところにそれを示す情報があふれていたように感じた。こうした、場合によってはマイナスにもなり得るまちの特色を逆手に取って、中心市街地活性化に生かしながら熊谷市の都市像を内外にPRしていると、率直に感じた。

言いたいことは、まちづくりを進めていくカギは、「アイデンティティ」にあるのではないかということだ。柏崎市が今後、更に中心市街地活性化、人を呼び込むまちづくりを進める上で、歩行空間や交流施設整備に加えて、「風のまち」のような、他のまちとは何か違った視点や特色が必要だと改めて感じた。

まちづくりの方向性としては、熊谷市は、熊谷駅と星川沿いのエリアを軸に、庁舎（公共施設）、民間施設などと公共交通を組み合わせ、ウォーカブルなまちを目指しており、駅ビル内のスペース活用を含めて、駅と中心市街地との一体的な開発が行われている。

対する柏崎市は、第六次総合計画や中心市街地活性化計画において、柏崎駅周辺から中央地区、比角地区をコンパクトシティの中心として位置づけ、人口と都市機能の両立を図る方針としている。今後整備される旧市役所跡地の（仮称）柏崎セントラルガーデンや移転した現在の新庁舎と合わせて、駅前から本町通りへ続くまちづくりの方向性は、規模感は異なるものの、行政施設と中心市街地の活性化を組み合わせる進めようとしている点は熊谷市と共通であり、お手本にできるのではないかな。

いずれにしても、柏崎市としては、身の丈に合ったコンパクトシティを目指すことが大切であり、新庁舎、（仮称）柏崎セントラルガーデン、フォンジェ（生活機能、子育て機能）を軸として、身近な暮らしとまちが一体となる中心市街地を再構築していくことが必要だと考える。

熊谷市が力を入れて取り組んでいる「星川まちなかアセット活用公民連携会議」の活発な活動を含め、今回の視察は大いに参考になった。

【佐藤和典】

熊谷市の視察では、「星川まちなかアセット活用公民連携会議」を中心に、行政主導から市民主体の公民連携へと転換を図る取組を学んだ。二つのビジョンのもと、星川夜市の開催や川床の整備、星川通線グリーンスローモビリティ走行社会実験、拠点づくり、市営本町駐車場の無料化など、既存の資産や公共空間を有効活用した施策が展開されている点が印象的であった。加えて、駅前から中心市街地へと人の流れを誘導する環境整備を進めることで、安心して滞在し回遊できる、にぎわいと交流の広がりを着実に生み出していた。こうした既存資源を活用した公民連携のまちづくりは、柏崎市の中心市街地活性化にとっても大いに参考と

なるものである。単なる施設整備にとどまらず、地域住民や民間事業者と目標を共有しながら連携を深め、市民が集える場の創出や駐車場環境の整備を含め、人々が滞在し回遊し続けたいとなるような持続可能な仕組みづくりを、今後模索していきたいと感じた視察であった。

【柄沢均】

熊谷市では、星川まちなかアセット活用公民連携会議を中心に、「公民連携」によるまちづくりが進められ、(一社)熊谷まちなか再生エリアプラットフォームが策定した「熊谷まちなか再生未来ビジョン」と、星川将来ビジョン編集委員会による「星川将来ビジョン」の二つのビジョンに基づき、行政（官ではなく公）主導から市民（民）主体のまちづくりへと転換が図られている。星川夜市や川床整備、星川通線グリーンスローモビリティ走行社会実験など、歩行者が安心して楽しく滞在できる空間づくりが進められ、まちなかのにぎわいが着実に広がっている。また、東西の商業核から第3の核である中心地への誘導を目的として、駅前からまちなかを歩かせる環境整備が進められ、連絡歩道橋へのシェルター設置や自転車シェアサイクルの社会実験、市営本町駐車場の無料化日を設けるなどの施策が成果につながっている。柏崎市においても、「まちなか交流広場」のように市民が気軽に集える場所の提供ができないか、また、駐車場の確保が可能かどうか、そして市民が主役の公民連携が定着できるか、調査研究を進めていきたい。

【星野正仁】

熊谷市の「公民連携まちづくり」の取組について視察し、星川周辺を中心としたまちなかの活性化について説明を受けた。特に「星川まちなかアセット活用公民連携会議」を通じ、行政と民間、地域の関係者が連携し、それぞれが持つ資源やアイデアを生かしながら、まちなかの価値を高めていく取組が印象的であった。また、「I T O M A」をはじめとするまちなかの拠点づくりとともに、市営本町駐車場の無料化など、人が中心市街地を訪れやすい環境を整え、回遊や滞在、交流を促すことで、にぎわいの創出につなげようとする考え方も大変参考となった。単に施設を整備するだけではなく、既存の地域資源や公共空間、民間の力を有効に活用し、公民が共通の目標を持って継続的にまちづくりを進めている点に大きな意義を感じた。柏崎市においても、中心市街地の活性化を進める上で、行政主導に偏ることなく、地域や民間事業者との連携を深め、既存資産を生かしながら人が集い、滞在し、回遊する仕組みづくりを進めることが重要であると感じた。